

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

Ⓕ

国 語

(200点
80分)

注 意 事 項

1 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

① 受験番号欄

受験番号(数字及び英字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

② 氏名欄、試験場コード欄

氏名・フリガナ及び試験場コード(数字)を記入しなさい。

2 この問題冊子は、43 ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。

なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。

3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

6 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(解答番号)

1

～

36

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

人間だけでなくすべての生きものは、その環境との境界面で、環境との最適な接触を維持することによって生命を保持している。子孫を残すために配偶者を見いだして生殖や子育ての行動を行い、寒暑や風雨を避けるために住居を確保したり居住地を変えたりし、敵から逃避したり競争相手をク(ア)チクしたりするのも、生物一般の生命維持の目的に沿ったものである。しかしなんといつても生きものがその環境から栄養を(イ)セツシユする食行動が、環境との境界における生命維持のもっとも基本的な営為であることは、異論のないところだろう。

生きものがその生命維持の行動を遂行するのは、いうまでもなく個々の個体としてである。各個体はそれぞれ固有の環境との接点で、ときには同種他個体との協力によつて、またときには同種他個体や異種個体との競合関係のなかで、自己自身の生存を求めて行動する。その場合、A ある個体と関係をもつ他の個体たちもやはり当の個体の環境を構成する要件となることはいうまでもないし、さらには当の個体自身の諸条件——たとえば空腹や疲労の程度、性的欲求、運動や感覚の能力など——も「内部環境」という意味で環境側の要件に加わってくる。そう考えると、個体と環境の接点あるいは境界というのがなにを指しているのかを一義的に確定するのはかなり困難なことになる。なによりもまず、個体自身を構成している諸条件がすべて環境ともみなされることになるなら、「個体」とはそもそもなにを指しているのだろう。ここでいわれる境界の「向こう側」にあるのが環境であるのはよいとして、同じこの境界の「こちら側」にはいったいながあるのだろう。そこに単純に個体あるいはその有機体をおくことはできそうもない。

複数の個体の場合はどうか。話を簡単にするために、互いに協力関係にある二人の人間、たとえば夫婦の場合を考えてみる。夫婦であっても、それぞれが自分自身の固有の世界を生活している独立の個人どうしであることに変わりはない。私は私の子ども時代以来の経験と記憶が集積したいまの現在を生活しているし、私の妻も同じことだ。これを単純に同化した、いわんや交換したりすることはできない。しかしどんな夫婦でも結婚以来の、これまた他の夫婦とは根本的に違った、二人だけの共同の歴史を

もっている。そしてそれによって、何かの事態に対して、とくに口に出して相談しなくても、無意識のうちにひとつのまとまった行動をとるシユウ(ウ)カンがついている。そのかぎりでは、夫婦をひとまとめにして一個の「個体」とみなしても差し支えない。それと同じことが家族全体とか、長年つきあっている友だちのあいだとか、共通の利害関係で結ばれたグループとかについてもいえるだろう。人間以外の動物の場合、たとえば魚や鳥の群、整然とした社会を作っている昆虫などについては、群全体がひとつの個体のように行動するという傾向がいつそうはつきりしている。

つまりこのような集団の場合でも、それがまとまった行動をとるのはやはり個体に準じて考えられる集団全体の存続という目的がそこにあるので、個体が生存を維持しようとする場合と同じように、環境との境界面で最適の接触を求めているといつてよい。そしてここでもやはり、この境界の「こちら側」に単純に集団全体というようなものをおくことはできない。第一、個体の場合と違って集団には環境とのあいだの物理的な境界線などというものがすでに存在しないのだし、集団を構成している複数の個体のそれぞれが集団全体にとっての重要な内部環境になっていることを考えてみても、ことはけつして簡単でないことがわかるだろう。集団を構成している各個体の行動は、けつして集団全体の行動に同化しつくされることなく、個体それぞれの個別的な欲求に対応してもいる。それぞれの個体がそれぞれの環境との境界面で独自の生命維持行動を営みながら、しかも全体としては集団の統一的な行動が保たれている。個別行動が全体の統制を破壊するような事態は、まず起こらない。

生物の個体とか、個体に準じて考えられる集団とかについて、それと環境との境界面における生命維持の営みが **B** 思いもかけぬ複雑な構造をもっていることは右に見たとおりのだが、これがそれぞれに確固とした自己意識を持っている人間集団の場合となると、その複雑さも飛躍的に増大する。たとえば家族の場合、外部環境との接触面では比較的まとまった行動を示す家族でも、家族の内部では個人個人の自己意識と自己主張が動物の場合とは比較にならぬほど強く表面に出る。個人の個別的な行動が家族全体のまとまりを破壊するような場合もけつして稀^希ではない。ここでは、人間以外の生物には出てこないような「私」と私以外の「他者たち」との対決が、集団としての家族のまとまりよりも明らかに優位に立っている。それと同じことが家族以外でも人間集団のあらゆる場面で見られることについては、いちいち例を挙げるまでもないだろう。

自己意識がどのような経緯で人間に備わったものなのか、それにはさまざまな仮説が可能だろう。しかしいずれにしても、それが「進化」のひとつの産物であることは間違いない。進化の産物だということは、生存の目的になつてゐるということである。自己意識を身につけることによつて、人間は環境とのセツ(エ)シヨウの中で新たな戦略を手に入れた。ところが、元來は生存に有利であるはずの自己意識が、同じく生存を目的としてゐるはずの集団行動と、ときには真つ向から対立することになる。ここに C 生物としての人間の、最大の悲劇が潜んでゐるのだらう。自己意識という人間の尊嚴に、それ本來の意味を取り戻させるためにはどうすればよいのか。

「私」の自己意識は単なる個体の個性の意識ではない。個体のそれぞれが自分は他の個体と別個の存在だということを認知する程度の意識なら、おそらく他の多くの動物にも備わつてゐるだらう。明確な個体識別能力を持つてゐる動物は少なくないし、他個体の個体識別と自己認知とは同じ一つの認知機能の両面である。それとは違つて、人間は自分自身をほかならぬ「私」として意識し、この一人称代名詞で(注1)言表される存在に、他のすべての個体とは絶対的に別次元の——他のもろもろの個体間の差異とは絶対的に異質の特異な差異でもつて他者から区別される——唯一無二の存在という特權的な意味を与えてゐる。「私」というのは、いわば等質空間内の任意の一点ではなく、むしろ円の中心にたとえられるような、それ以外の一切の点と質的に異なつた特異点である。

このような「私」としての自己と他者たちとのあいだにも、精神分析のいう「自我境界」という形での境界線を考えることはできない。ふつうにいわれる「自己関係」とは、この境界線上でかわされる心理的な関係ということだらう。そこではやはり境界をはきんだ二つの領域が想定されていて、他者は外部世界に、自己は内部世界におかれることになる。 D しかしそのようなイメージは、特異点としての「私」という自己を考える場合には適切でない。「私」が円の中心だとするならば、私以外のすべての他者は中心の外にゐることになる。「私」自身ですら、これを意識したとたんに中心から外へ押し出される。しかし中心には内部というものがない。あるいは中心それ自身を「内部」と見るなら、中心は「内」と「外」の境界それ自身だということになる。「私」と他者との関係もそれと同じで、「私」は「内」でありながら「内」と「外」の境界それ自身でもあるという非合理的な位置を占めてゐる。「私」と

は、実は「自我境界」そのものことだといつていい。

等質空間に引かれた境界線と違つて、生命空間における個体と環境の境界は、その「こちら側」にあるはずの「内部」をもたない。同じことを別の言い方でいうなら、生きものそれ自身とそれ自身でないものとの境界そのものとして、この境界を生きている。この自己と他者の「境界」を、生きるだけでなくはつきり意識するところに、人間的な自己意識が生まれる。そしてこのことは個々の個体だけでなく、集団全体についても同じように言える。人間の場合、「私」だけでなく「われわれ」もやはり他者との境界を生き、そしてそれを意識している。

生命の営みは、これを物理空間に投影してみると、すべて境界という形をとるのではないか。逆に言つて、われわれの周りの世界にあるすべての境界には——空間的な境界も時間的な境界も含めて——そこにつねに定かならぬ生命の気配が感じられるといつていい。この気配こそ、境界というものを合理的に説明し^(注2)つくせない不思議な場所^(オ)にしているものなのだろう。境界とはまだ形をとらない生命の——^(注2)ニーチエの言葉を借りれば「力への意志」の——住みかなのではないか。

(木村敏「境界としての自己」による)

(注) 1 言表——言語によつてなされた表現。

2 ニーチエ——フリードリヒ・ニーチエ。ドイツの哲学者(一八四四—一九〇〇)。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
く
5

(ア)

クチク

- ① 資料をチクセキする
 ② ボクチク業を始める
 ③ 経過をチクジ報告する
 ④ 彼とはチクバの友だ
 ⑤ 独自の理論をコウチクする

(イ)

セツシユ

- ① セツレツな文章
 ② 自然のセツリに従う
 ③ 試合に勝つてセツジヨクを果たす
 ④ 訪問者にオウセツする
 ⑤ クツセツした思いをいだく

(ウ)

シユウカン

- ① 勝利にカンキする
 ② 国境線をカンシする
 ③ けが人をカンゴする
 ④ 血液のジュンカン
 ⑤ 今までのカンレイに従う

(エ)

セツシヨウ

- ① 依頼をシヨウダクする
 ② 事実をシヨウサイに調べる
 ③ 意見がシヨウトツする
 ④ 外国とコウシヨウする
 ⑤ 作業工程のシヨウリヨク化をはかる

(オ)

ツクセナイ

- ① ジンソクに対処する
 ② テキジンに攻め入る
 ③ 損害はジンダイだ
 ④ ジンジョウな方法では解決しない
 ⑤ 地域の発展にジンリヨクする

問2 傍線部A「ある個体と関係をもつ他の個体たちもやはり当の個体の環境を構成する要件となる」とあるが、それはどういう

ことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① ある個体にとって、種の存続を担う子孫のような存在に加え、配偶者をめぐって競い合う他の個体もまた環境の一部となること。
- ② ある個体にとって、食物をめぐる争いの相手に加え、協調して生活をしていく異種の個体もまた環境の一部となること。
- ③ ある個体にとって、空腹や疲労のような生理現象に加え、生息圏に生い茂るさまざまな植物などもまた環境の一部となること。
- ④ ある個体にとって、気象のような自然現象に加え、食行動などの場面で交わる他の個体もまた環境の一部となること。
- ⑤ ある個体にとって、自らの生命維持に必要な自然の空間に加え、他の個体と暮らすための空間などもまた環境の一部となること。

問3 傍線部B「思いもかけぬ複雑な構造をもっている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、その内部環境を構成する各個体は集団からの自立をはかることで個体としての存在を保っている。それゆえ、内部環境は緊張関係を常にはらんでいるということ。
- ② 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、生命維持の具体的な局面においては内部の個体相互の利害関係が表面化しやすい。そのため、実際には集団行動の統一性の内実が常に変容しているということ。
- ③ 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、その内部環境を構成する各個体はそれぞれ自由に行動している。ただしここでは、集団として常に最適な結果を生み出す調整がはかられるということ。
- ④ 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、統制の破壊行動を起こす個体が内部に生じることもありうる。しかしながら、各集団の生命維持行動においておのずとその可能性は封じ込められるということ。
- ⑤ 外部環境に対して一個体のように見える集団であっても、その内部環境を構成する各個体は個々の欲求に基づいて活動している。それにもかかわらず、生命維持に必要な集団のまとまりは失われないということ。

問4 傍線部C「生物としての人間の、最大の悲劇」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の

①く⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 人間は自己意識を備えることで、より環境に適した接触が可能になったが、場合によっては個体の意識と集団の目的とのあいだに矛盾が生じ、集団を崩壊に導くような事態や個体の存続を脅かす現実さえ招くようになるということ。
- ② 人間は自己意識を備えることで、他の生物には見られない強固な集団維持という目的を共有する社会を形成したが、場合によっては集団全体の統制を優先して、個体の欲求を抑圧する状況が生み出されるようになるということ。
- ③ 人間は自己意識を備えることで、より環境との調和をはかるようになったが、場合によっては生存競争において他の生物との対決能力が弱まり、種の存続が危ぶまれる可能性をも抱えるようになるということ。
- ④ 人間は自己意識を備えることで、他の生物から戦略的に身を守るようになったが、場合によっては集団を防御する意識が過剰になり、集団間の利害をめぐる他の生物には見られない形の闘争が起こるようになるということ。
- ⑤ 人間は自己意識を備えることで、より有利な環境との接点を獲得したが、場合によっては環境に大きな変化をもたらす、自らの集団維持行動が脅かされるほどの深刻な事態に陥るようになるということ。

問5 傍線部D「しかしそのようなイメージは、特異点としての『私』という自己を考える場合には適切でない。」とあるが、筆者

はどのような考えから適切でないかと判断しているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ

選べ。解答番号は

9

① 人間の認知機能を他個体と自己とを識別するものととらえる見方は、自己と他者とのあいだに引かれた絶対的な境界線の存在を前提にしているが、自己を円の中心のような存在であるとみなす場合、「私」の内部世界の意味が変わり境界は相対的なものになってしまうという考え。

② 世界の中での特異な自己の位置を定める精神分析的な「私」のとらえ方は、境界線を等質空間に設定することで安定的に成立するが、自己意識としての「私」は境界線上に位置しているので、必然的に他者に対して自らを特権化しすぎてしまうという考え。

③ 他者の属する外部世界との対立関係で自己をとらえる見方は、境界に隔てられた空間的な内部世界を想定しているが、絶対的な異質性をもつ「私」の自己意識は内部空間をもたない円の中心のようなものであり、むしろ他者との境界そのものにほかならないという考え。

④ 個体の外部に境界を設定して自己の絶対的な異質性を確立する「私」の世界のとらえ方は、特権的な一人称代名詞のはたらきによって強く支えられているが、他者も同様な言語のはたらきによって内部世界をとらえているとすると、境界は共有されることになってしまうという考え。

⑤ すべての他者を外部世界に置き自己を内部世界に押し込めるような「私」のとらえ方は、認知機能上の絶対的な境界線を想定するものであるが、当の内部世界にある自己意識は自らが空間的中心にあることを合理的に証明できないので、「私」はむしろ境界線上にあるといわざるをえないという考え。

問6 この文章の論の展開に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

① まず、環境との境界面における生命維持の営みについて、個々の個体の場合と複数の個体の場合との異なりを明らかにしている。つぎに、問題は集団と自己との関係性にあるとの指摘に及ぶ。最後に、人間の自己意識が自己と他者の境界にしか生まれえないとの結論づけを、生命の営みを物理空間に投影する方法によって立証している。

② まず、環境との境界面における生命維持の営みについて、群全体や家族全体という集団の場合を対象として考察している。つぎに、個の集団に対する関係がその複雑さを増大させている、との指摘に及ぶ。最後に、個々の個体だけでなく集団全体においても他者との境界を生き、それを自己が意識している、との結論を検証している。

③ まず、すべての生きものが、その環境との境界面で、環境との最適な接触を維持することによって生命を保持している、との結論を明示している。つぎに、冒頭の結論を個体と集団との場合にあってはめて検証する。最後に、個体と環境との境界における生命の営みの観察を説明することから冒頭の結論へと再び立ち戻っている。

④ まず、環境との境界面における生命維持の営みについて、個体と集団それぞれの場合を対象として考察している。つぎに、他の生物に比して人間の場合は、自己意識の存在が集団と個体との関係を難しくしている、と指摘する。最後に、人間の自己意識は境界を意識するところに生まれ、そこに生命の営みがある、という結論に導いている。

⑤ まず、環境との境界面における生命維持の営みについて、その境界には何があるのかという問題を提示している。つぎに、その問題を一般化するために自己意識の存在に着目する。最後に、「私」をはじめ「われわれ」人間、さらにすべての生きものにおける生命の営みは、境界といわれる場では十全な形にはなりえない、と結論づけている。

第2問

次の文章は、井伏鱒二の小説「たま虫を見る」の全文である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。(配点 50)

おそらく私ほど幾度も悲しいときにだけ、(注1)たま虫を見たことのある人はあるまいと思う。

よその標本室に行ってみて、その部屋で私達はおびただしい昆虫にでくわ会すであろうが、たま虫ほど美しい昆虫を発見することは出来ないのである。私達はこの昆虫の死骸しがいの前に立ち止どまつて、或いは感動の瞳ひとみをむけながら囁ささやくであろう。

「めつたに見たことのない虫だが、これは未まだ生きているのではないかね？」

「死んじまっても羽根の色は変からないらしいんだよ。」

「この色は幸福のシンボルだそうだよ。書物にそういつて書いてあるんだ。」

「何どういつて鳴く虫だろう？」

「まるで生きているようじゃないか！」

——ところが私見たのは標本室ではなくて、生きているやつなのである。

10

私が十歳の時、私の兄と私とは、叔母につれられて温泉場へ行った。叔母は私の母よりも以上に口やかましい人で、私があまり度々お湯へ入ることを厳禁して、その代りに算術かむの復習を命じた。そのため私は殆ほとんど終日、尺を里・町・間(注2)になおしたり、坪を町・段・畝(注3)になおしたりした。

或る日、私は便所の壁に(村杉正一郎のバカ)というらくがきを発見した。村杉正一郎は私の兄と同級で級長をしていたので、

15 兄は正一郎を羨うらやんだものに違ちがいなかった。けれど温泉場は私達の学校から幾十哩(注4)も隔へつたところにあつたので、村杉正一郎や彼の知人が、便所のらくがきを見る筈はずはなかつたのである。私は兄の(ア)浅慮ちんりょを全く嘲笑ちやうしやうした。

「叔母さんに言いつけてやろう。」

「言つたらなぐるぞー！」

20 兄は実際に私の頬をなぐった。私は木立ちの中に駆け込んで、このことは何うしても叔母に言いつけなくてはならないと考えながら大声に泣いた。この悲しい時、私の頬をくつつけている木の幹に、私は一匹の美しい虫を見つけたのである。私は蟬を捕える時と同様に、忍び寄つてそれを捕えた。そしてこの虫は何ういつて鳴くのであろうかと、(注)啞蟬をこころみるときに同様にその虫を耳もとでふつてみた。

25 美しい虫であつた。羽根は光つていた。私はこの虫を兄にも見せてやろうと思つたが、兄の意地悪に気がついた。叔母は私が算術を怠けたといつて叱るにちがひなかつた。誰にこの美しい虫を見せてよいかわからなかつた。A 私はもとの悲しさに返つて、泣くことをつづけたのである。

「何故この虫は折角こんな美しくつても、私が面白い時に飛んで来なかつたのだらう」

それから十幾年もたつて、私は再びこの昆虫を見つけたのである。

30 すでに私は大学生になつていて、恋人さえ持つていた。恋人は美しく且つ可憐で、彼女は私と一しよに散歩することを最も好んだ。

郊外の畑地は全く耕されていなかったので、彼女が田舎へ出発してしまふ前の日にも、私達はその畑地を野原とみなした。積み重ねた煉瓦と材木とは、私達の密会をどの家の二階からも電車の窓からも見えなくした。

「ぎつと、お手紙下されば、私はほんとに幸福ですわ……空があんなに青く晴れているんですもの。」

35 彼女は日常は極めて快活であつたが、恋愛を語ろうとする時だけは、少なからず(イ)通俗的でまた感傷的であつた。そして物事をすべて厳密に約束する癖があつた。

「明日は午後二時三十分にあそこで待っていますわ。」

「僕等は三時まで学校があります。」

「では三時三十分頃、そしてきつとお待ちしていますわ。」

40 私は決心して彼女の肩の上に手を置いた。そのとき、急にはその名前を思い出せないほどの美しい一ぴきの昆虫が、私のレインコートの胸にとまっていたいたのである。彼女はすばやく指先でその昆虫をはじき落してしまったので、私は周章^{あわ}てて叫んだ。

「たま虫ですよ！」

しかし最早たま虫はその羽根を撃ちくだかれて、腹を見せながら死んでいた。私はそれを拾いとうろとしたが、彼女はそれよりも早く草履でふみにじった。

「このレインコートの色ね。」

45 そして彼女は私の胸に視線をうつしたのであるが、私は彼女の肩に再び手を置く機会を失ってしまった。私達はお互^{たがひ}に暫く黙っていた後で、私は言った。

「あなたは、このレインコートの色は嫌いだったのですね！」

「あら、ちつともそんなことありませんわ。たま虫って美しい虫ですもの。」

「でも、あなたはそれをふみつぶしちゃいました。」

50 「だってあなたの胸のところに虫がついていたんですもの。」

B 私達はお互に深い吐息をついたり、相手をとがめるような瞳をむけあつたりしたのである。

55 牛込警察署は、私を注意人物とみなした。私が学生でもなく勤め人でもなく、そして誰よりも貧困であつたからなのであろう。呼び出しのあつた日に、私の友人は顔を剃^そったり風呂^{ふろ}に入^いつたりしてから、私の代りに警察署へ出頭^{しゅつとう}してくれた。そして彼の報告によれば、私が街で立ちどまっているところを写したキャビネ型^(注6)写真を示されたというのである。私は何時^{いつ}の間に写された

かそれを知らない。写真では私が冬のインバネス(注7)を着て夏のハンチング(注8)を冠かぶつて(これは最近の私の服装である)エハガキ屋(注9)の飾り看板を顔をしかめながら眺め入っているところだ。そうして写真の横のところには朱でもって——危険思想抱懐せるもの(注9)の疑いあり——と記入されていたという。

60 私はインバネスを着て外に出た。私は牛込署へ出頭するのではなくて、エハガキ屋の店先へ行つたのである。そして飾り看板を見上げながら顔をしかめてみた。飾り看板の硝子がらすの中には、数枚の裸体画(注10)と活動女優の絵葉書とが入れてあつた。たしかに私はこの姿勢でもつてこの表情で……

「ここに虫がいる！」

65 たま虫が、硝子の破れ目に一本の脚をかけてぶら下さがつている。私は手をのばしてそれを捕えようとした。けれど今も私の直ぐ後ろで警察の人達がカメラをもつて私をねらっているかもわからない。彼等は、私が昆虫を掴つかまえようとして手をのばしたところを、絵葉書を盗もうとしている姿勢に写すかもしれない。私は随分ながいあいだたま虫を眺めながら、顔をしかめる表情を続けてみた。C 硝子にうつる私の顔は、泣き顔に見えた。

「この昆虫はどうして斯こんなに私が不機嫌なときに見つかるのだろう？」

70 就職口が見つかったので、叔母にそのことを報告してやると、彼女から祝いの手紙が来た。彼女はかつて私達を毎年温泉場へつれて行ってくれたところの叔母であつて、今は修道院に入っている。彼女の手紙は実にくどくて、手紙の終おわりには必ず数行の格言が書いてあつたのだ。今度は次のように書いてあつた。

「貧しくとも正しく働け。悩むとも、聖霊とともにそれが如何いかに正しき悩みなるかを知れよ。絶望はいびつなる悩みであることを知れ。」

75 私は叔母のこの平凡な文章を嘲笑したのではなく、寧むじろ彼女の(ウ)さしでがましき(ウ)によって力づけられ慰められるのを知つた

のである。しかし私の勤めぶりは上等ではなかった。

(注11)
(旧古書林校正係)

自分のこの肩書きを私は自慢にしていたわけではなかったのだが、勤めてから幾らもたない時、編輯員へんしゅういんの松本清太郎は私の頭をなぐった。私が生意気で校正が下手だというのだ。私は自分が喧嘩けんかに弱いと信じていたので、彼に対して反抗しなかった。

「……………」

俺おれは弱いな？　そういうことを思いながら彼になぐられたのである。こんな場合には、なぐられた者の方が必ずつまらなく不愉快になるに相違なかった。私は幾度もそれとは反対の考えを持つとと努力したのであるが、それは駄目であった。

私は髪床屋へ行つた。そこを出て、冷たい手で頤おきを撫なせてみた時、私は電信柱の根元に一匹のたま虫が死んでいるのを発見したのである。

85 「いまに蟻ありが群むらるだろう。」

私はその昆虫を拾いあげて、それを電信柱にとまらせてみた。けれど動かなくなった彼の脚は、木肌のどの窪くぼみにも擱つかまることをしなかった。私は彼を今度は木肌の割れ目にぶらさがらせようとした。ところが私はあまりデリケートに彼を取扱しゅあつかわなかったので、枯渴した彼の前脚を折ってしまった。私はゲラ刷(注12)りの綴針とじはりをぬきとつて、彼を標本みたいに電信柱にとめつけた。

「何うだ、生きてるように見えないかね？」

90 そうして私は、生きてるように見えるたま虫を袖そでのなかにしまつて、停留場(注13)の安全地帯に入つた。人々は電車の来る度毎ごとに

私を後ろにおしのけ、電車で行つてしまうと私を前にゆずつた。D 私は人を押しおしのけはしないのだと心のなかで思いながら、
実は少しばかり人を押しおしのけながら割り込む必要を覚えた。

数日たつて或る夜更けに私はすでに寢床に入つていたのであるが、袖のなかのたま虫を見てみることにした。その夜、

私は宝焼酎(注14)をのんだので、幾ら水をのんでも咽(のど)のかわく夢をみて眠れなかったからである。

私はたま虫のことを忘れてしまっていたのだ——たま虫が着物の袖のなかで少量の醜悪な粉末となっているのを発見して、私はその粉末を窓の外にふぎとばした。私は夢ではなしに事実、冷水(おひや)のみながら考えた。

「今度たま虫を見ることがあるとすれば、それはどんな時だろう——私の不幸の濃度を一ぴぎずつの昆虫が計ってみせてくれる。」

再び夢で水をのむとき、私は水をのみながらオルガンを上手にひいていた。最近私は、若し失職したならば叔母に依頼して、牧師になるように手続きしてもらおうと思っていたのである。

(注)

1 たま虫——光沢を持つ甲虫の一種。金緑色に赤紫色の二本の縦線がある。また、光線の具合によつて色が変わつて見える染め色・織り色をたま虫色という。

2 尺——長さの単位。「里」「町」「間」も同じ。

3 坪——面積の単位。「町」「段」「畝」も同じ。

4 哩——距離の単位。一哩は、約一・六キロメートル。

5 啞蟬——鳴かない蟬、雌の蟬。

6 キヤビネ型——写真の大きさの一つ。

7 インバネス——和服用に流行した袖なしのオーバーコート。

8 ハンチング——前にひさしのついた平たい帽子。

9 エハガキ屋——絵葉書を売る店。二〇世紀初頭に流行した。

10 活動——「活動写真」の略称で、映画の旧称。

11 校正係——印刷の工程で、文字の誤りや不備などを正す仕事。

12 ゲラ刷りの綴針——「ゲラ刷り」は校正用に印刷物の試し刷りをしたもの。「綴針」はそれを綴とじるための針。

13 停留場の安全地帯——路面電車に乗り降りするための場所。

14 宝焼酎——焼酎の銘柄の一つ。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 11 ～ 13。

(ア) 浅慮を全く嘲笑した

11

- ① 短絡的な考えに対して心の底から見下した
- ② 卑怯ひきょうなもくろみに対してためらわず軽蔑けいべつした
- ③ 粗暴な行動に対して極めて冷淡な態度をとった
- ④ 大人げない計略に対して容赦なく非難した
- ⑤ 軽率な思いつきに対してひたすら無視した

(イ) 通俗的

12

- ① 野卑で品位を欠いているさま
- ② 素朴で面白くないさま
- ③ 気弱で見た目を気にするさま
- ④ 平凡でありきたりなさま
- ⑤ 謙虚でひかえ目なさま

(ウ) さしでがましき

13

- ① 人の気持ちを酌んで自分の主張を変えること
- ② 人のことを思い通りに操ろうとすること
- ③ 人の事情に踏み込んで無遠慮に意見したがること
- ④ 人の意向よりも自分の都合を優先したがること
- ⑤ 人の境遇を自分のことのように思いやること

問2 傍線部A「私はもとの悲しさに返って、泣くことをつづけたのである。」とあるが、その時の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

- ① 兄になぐられて木立ちの中に駆け込んだ時の悔しさが思い出され、誰とも打ち解けられずひとりやり過ぎすしかない寂しさをかみしめている。
- ② 抵抗もできずに兄から逃げ出した時の臆病おくびようさを思い返し、ひとりで隠れていても兄や叔母にいつ見つかるかわからないという恐怖におののいている。
- ③ 兄に歯向かうことができなかった情けなさを改めて自覚し、自分の切実な望みが兄や叔母によって妨げられることへの憤りを感じている。
- ④ 兄の粗暴な振る舞いに対する怒りに再びつき動かされ、仕返しをしようとしても叔母への告げ口しか思いつかない無力感に苦しんでいる。
- ⑤ 兄の過ちを正面から諭さなかったことを後悔し、自分の行動の意図が兄はもちろん叔母にも理解されないだろうという失望感に襲われている。

問3

傍線部B「私達はお互に深い吐息をついたり、相手をとがめるような瞳をむけあったりしたのである。」に至るまでの二人のやりとりの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15

① 私は、幼い時から好んでいるたま虫が邪険にされたことを悲しみ、恋人の優しさに疑いを抱いて発言しているが、恋人は、自分よりもたま虫を大切に扱うかのような私の態度に驚き悲しんでおり、互いに不信感を持ち、うらめしいような気持ちになっている。

② 私は、悲しい体験を思い出させるたま虫が恋人との密会時に現れたことにとまどい、過去の経験にとらわれているが、恋人は、たま虫を私のコートにとまった虫としてはじき落としたのにその配慮に気づかない私に失望し、互いに相手を理解できない気持ちになっている。

③ 私は、肩に置いた手をたま虫を口実にして恋人に振り払われたと考え、ショックを受けているが、恋人は、その私をなだめようとしたのに私がよそよそしい態度をとり続けているので意外に思い、互いに相手の態度にとまどい、責めるような気持ちになっている。

④ 私は、幸福のシンボルとしてのたま虫が恋人との密会時に現れたので気持ちを高ぶらせ、それを恋人に伝えようとしているが、恋人は、私がいったん肩に手を置きながらたま虫に気をとられたことに傷ついており、互いの言葉が通じないことに苛立^{いらだ}つ気持ちになっている。

⑤ 私は、突然現れた美しいたま虫を無慈悲に扱われたことに驚き、恋人を責めるような発言をしているが、恋人は、大切な二人の時間を邪魔したたま虫をはじき落としたのに相手が理解してくれないと思い、互いに落胆し、非難するような気持ちになっている。

問4 傍線部C「硝子にうつる私の顔は、泣き顔に見えた。」とあるが、なぜそう見えたのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 飾り看板を眺め入っていただけのところを写真に撮られて、警察に疑いをかけられてしまった自分の立場を意識するあまり、思いがけず見つけたたま虫を掴まえることまでためらってしまう自分に情けなさを感じているから。
- ② 美しいたま虫を見つけたにもかかわらず、貧乏で社会的にも不安定な立場にあるとの理由で警察に疑いをかけられてしまう可能性があるため、たま虫を掴まえないという長年の希望をかなえられない自分に悔しさを感じているから。
- ③ たま虫を掴まえようとしていたために警察に誤解されたのだと気がついたが、今おかれている立場ではそれを説明しても誤解は解けないと予想して、たま虫に手をのばすことができない自分に無力さを感じているから。
- ④ 自分が写真に撮られた理由を確認するという目的があつて来たのにもかかわらず、警察に疑われている立場を忘れて突然現れたたま虫の美しさに心を奪われ、ながいあいだたま虫を眺めている自分にふがいなさを感じているから。
- ⑤ 警察に注意人物とみなされ出頭を命じられるという困難な状況に追い込まれている立場を意識するあまり、以前から好きだったたま虫を偶然に発見しても、その美しさを感じる余裕を持ってない自分に寂しさを感じているから。

問5

傍線部D「私は人を押しつけはしないのだと心のなかで思いながら、実は少しばかり人を押しつけながら割り込む必要を覚えた。」とあるが、この時の私の考えはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 自分と他人の幸福を比較しても仕方がないと知っているので、他人以上に幸せになろうとしたり、他人の幸福を妨げたりはするまいと思いつながら、世の中で自分の幸せを見つけるためには、何か行動を起こして他人とぶつかる必要もあると気づきはじめています。
- ② 自分の出世のために他人を踏み台にしてもどうしようもないと知っているので、自分に有利な状況を作るようなことはしたくないと思いつながら、自分の態度をわずかながら変化させることで、周囲とのより良い関係を保てるという可能性に気づきはじめています。
- ③ 自分自身は弱い人間だと知っているので、反抗せずに負けて不愉快な状況になるのは仕方がないとあきらめ、人に対して強く自己主張はするまいと思いつながら、社会の中で生きていくためには、自分の立場も守らなければならないことに気づきはじめています。
- ④ 自分は正当な助言や指導を与えられれば素直に従う性格だと知っているので、他人の言葉を受け入れて自らの行動を決めようと思いつながら、他人の言葉の裏には自分を支配したい欲求もあるのだから、時にはそれをはねのけた方がよいとも気づきはじめています。
- ⑤ 自分よりも強い相手には逆らわないようにするのが無難だと知っているので、あらかじめ自分の限界を決めて新しいことには踏みきるまいと思いつながら、人々と共に生きるためには相手の気持ちに配慮しつつ、自分の望む形を通すことも大切であると気づきはじめています。

問6 この文章における表現の特徴の説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

18

19

- ① 過去の回想として描かれた各部分の内部は、まず語り手が出来事の概略を述べ、次に登場人物の私に寄り添ってその視点からそれぞれの出来事を主観的に語るという手法をとっている。
- ② 11行目以降は、小学生時代、大学生時代、無職時代、校正係時代における私の「悲しいとき」の状況を、羽根の色が幸福のシンボルとされるたま虫との関わりを通して描くという構成になっている。
- ③ 88行目の「私はゲラ刷りの綴針をぬきとって、彼を標本みたいに電信柱にとめつけた」という描写には比喩表現が用いられていて、たま虫に自分自身の境遇を投影する私の心境が効果的に描き出されている。
- ④ 89行目と90行目で「生きているように」と繰り返すことで、死んだように生きていると感じている私と比べ、より生き生きとして見えるたま虫の様子を明示的に表している。
- ⑤ 94行目からの最終場面で四回繰り返して述べられている「水をのむ」ことは、たま虫が粉末になったことと対比されている。また、たま虫の乾いた死を引き合いに出して、みずみずしさを保っている私の生を強調している。
- ⑥ 幸福についての私の考え方の変化を、96行目からの「たま虫のことを忘れて」「醜悪な粉末となっているのを発見し」「その粉末を窓の外にふきとばした」という一連の描写を通して象徴的に表現している。

第3問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

(注1) この国の都なすあたりのかたはらなる、中田といふ所に住む人ありけり。代々鷹飼ふことをわざとしつつ、身はいやしなから、志ありて、あがれる世の手ぶりを慕ひ、何くれと学ばまく欲りするなかに、手書くことをなん、たてては好めりし。されど、摺巻(注2)に伝はれる書のほか、師とする人もなき山ふところに、あやなく思ひをくらさんよりは、山城(注3)の大都に上りて、(ア)高き手ぶりをも見あきらめばやと、ゆくりなく思ひおこして、岩根黒土踏みさくみて、文化四年といふ年の弥生(注4)ばかり、まるのぼれりしに、世のわき知らぬ山がつのおしはかりとはたがひて、高き宮のうちには、かくと言ひよらんたづきもなく、至れるいやしき身には、御伝へも下らずと聞きて、はやりかなりし心もしなへうらぶれつつ、**X** 行く先をようもたどらでおほけなく思ひ立ちぬることを思へば、井に住む鮎(注5)の大海に出でぬるに似たり。かくのみにて空しく帰らんことを思へば、鳴る神につく獸(注5)の雲におくれたるに似たり。(イ) いとはしたなりと思ひ屈しつつ、名所など見めぐりて籠りをりき。

さるは、石井了陸といふ人のもとにぞ宿れりし。この家に、おぼえずおぼえず持明院(注6)の宮の宮人来あひて、酒飲み、物語などするに、「この田舎人は、かかる志の侍りて、はるばるにまるのぼり来しき、その志遂げずして帰らんことを、いたく思ひ嘆き侍るなり」と、あるじの語り出でたるを、かの宮人つぶさに聞きて、「**Y** いと不便なりつることかな。おしなべては叶(注7)ひがたきことなれど、志の深さには、高きいやしきけぢめもなきものぞ。我よくこととり申さんと、うけがは **a** れたるに、うれしきことたとへんものなし。この人のはからひによりて、おほけなき御前わたりも御許しありて、入木(注7)といふ書法を御手づから伝へたまはせりなどしつつ、(ウ) 本意にもこえて事なりぬれば、身に余りてうれしと思ひて、道の奥に下るきざみ、先の宮人、この人の二なき志をめで給ひて、琴を送られしが、絃一筋ある琴 **b** なりき。これに歌そへよとあるに、

A 一筋に思ふ心は玉琴の緒によそへつつひきや伝へむ

家なども、もとよりは広く清らに作りなして、めぐりに松子植ゑわたし、移り行く月日にそへてめではやししを、こたみ公よ

り蝦夷が千島に防守を置かることありて、この国よりもまづ出ださるるによりて、その数に指されて、出で立たむとす。「行き帰るまで、さる広き家に女子のみ置きては守りがたし」とて、家をば売り、女子は人のもとに預けて行く。その心にかはりて、

B 家出でて行くかひありと思ひしに家なくなりて行けばかひなし

C 二筋に落つる涙も一筋の玉の小琴にかけ(注8)にけるかも

その琴は、むかし行平の中納言、流されて須磨におはせし時、庇の杉を風の吹きおとしたるが、その形面白かりければ、(注9)くしげの箱なる元結を(注10)一筋ひきかけて、調べ給へるよりはじまりて、今も伝はれるなりとぞ。

(『真葛がはら』による)

(注) 1 この国——陸奥。今の東北地方。

2 摺巻——印刷本。

3 山城の大都——京都。

4 文化四年——一八〇七年。

5 鳴る神につく獣——想像上の怪獣。落雷とともに地上に落ちてくると伝えられていた。

6 宮人——貴人に仕える人。

7 入木といふ書法——ここでは、中世末から宮廷貴族の書風として継承されていた持明院流の書道をいう。

8 行平の中納言——在原行平。平安時代の歌人。

9 くしげの箱——髪を結うための道具などを入れておく箱。

10 元結——髪をたばねて結うための細い糸。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20

22

(ア) 高き手ぶりをも見あきらめばや

20

- ① 高度な書法をも自分の目で見つけたものだ
- ② 高貴な書風をも気のすむまで見られるだろう
- ③ 高名な筆さばきをも正しく見分けられるだろうか
- ④ 高尚な筆運びをもまねてから見切りをつけよう
- ⑤ 高雅な筆づかいをもはつきりと見きわめたい

(イ) いとはしたなりと思ひ屈しつ

21

- ① 本当に愚かだったと悔やみながら
- ② まことに体裁が悪いといらだちながら
- ③ とても終わらないとあきらめながら
- ④ 実にきまりが悪いと気落ちしながら
- ⑤ まったく中途半端だと腹を立てながら

(ウ) 本意にもこえて事なりぬれば

22

- ① 前もって想像していた以上に書道の基礎ができていたので
- ② かねて願っていた以上に成果を上げることができたので
- ③ あらかじめ考えていた以上に強く熱意を伝えることができたので
- ④ これまで思いついた以上の手法を編み出すことができたので
- ⑤ はじめに思っていた以上にたやすく書法を伝えることができたので

問2 波線部 a ～ d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

23

- | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|--------|---|--------|---|---------|
| ① | a | 受身の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 動詞の活用語尾 |
| ② | a | 尊敬の助動詞 | b | 伝聞の助動詞 | c | 格助詞 | d | 動詞の活用語尾 |
| ③ | a | 受身の助動詞 | b | 伝聞の助動詞 | c | 断定の助動詞 | d | 完了の助動詞 |
| ④ | a | 尊敬の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 格助詞 | d | 動詞の活用語尾 |
| ⑤ | a | 尊敬の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 完了の助動詞 |

問3

傍線部X「行く先をようもたどらで」とあるが、この部分から陸奥の鷹飼いのどのような一面が読み取れるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

24。

- ① 京都のしきたりを知らない自分をかえりみずに、いきなり高貴な宮家に押しかけてしまうような、身の程知らずなところがあるということ。
- ② 自分の夢をかなえるための現実的な手段をあらかじめ検討せずに、突然思い切った行動を取ってしまうような、無鉄砲なところがあるということ。
- ③ 一度挫折した程度で長年持ち続けた夢をあきらめ、あてもなく都見物に興じて自分をごまかすような、現実逃避に走るところがあるということ。
- ④ 夢を実現するためにわざわざ陸奥からやって来たのに、いざとなると高貴な宮家の門をたたくことに怖じ気づいてしまふような、弱気なところがあるということ。
- ⑤ 京都で挫折を味わった後も自分の夢に見切りをつけられず、すぐには帰郷できないような、あきらめの悪いところがあるということ。

問4

傍線部Y「いと不便なりつることかな」とあるが、この言葉には宮人のどのような気持ちがこめられているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

- ① 陸奥の鷹飼いがどれほど強い向上心を持っていても、身分が低すぎるために教えることができず、結局は何の成果もないまま帰郷しなければならないという話を聞いて、その境遇に同情する気持ち。
- ② 身分の違いを理由に入門を断られた陸奥の鷹飼いが、ただ嘆き悲しむばかりで何も手立てを講じず、名所見物によって心を慰めているという話を聞いて、初心を忘れたかのような態度をもどかしく思う気持ち。
- ③ 身分の差を乗り越えて高貴な宮から教えを受けるために陸奥から上京したにもかかわらず、その夢に挫折しそうになつていくという鷹飼いの話を聞いて、難しい相談事を持ちかけられたと当惑する気持ち。
- ④ はるばる陸奥から上京した鷹飼いから、京都のしきたりが分からないため芸道を学ぶ夢をあきらめるしかない打ち明けられたが、身分の違いがある以上どうすることもできないものだと思われに思う気持ち。
- ⑤ 石井了陸から聞かされた陸奥の鷹飼いの話をきっかけに、身分の差によって入門を許される者と許されない者がいるという芸道のあり方の古めかしさに気づかされ、その不自由さを煩わしく思う気持ち。

問5 AとCの和歌に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① Aは、持明院の宮の宮人が詠んだものであり、絃の数を意味する「一筋」を、ひたむきで一途だいちずという意味でも用いることにより、自分が陸奥の鷹飼いに寄せてきた一途な思いやりを忘れないでほしいと願っている。
- ② Aは、陸奥の鷹飼いが詠んだものであり、「ひき」という語に琴を演奏する意の「弾き」だけでなく、引き立てて優遇する意の「引き」を掛けることで、琴の送り主である宮人からの引き立てに感謝する気持ちを含めていいる。
- ③ Bは、作者が陸奥の鷹飼いになりかわって詠んだものであり、上の句と下の句を対照させて、売りに出した家が任務を終えて戻ったときにはなくなっているかもしれないと想定することで、世の無常のさまを際立たせていいる。
- ④ Cは、作者が陸奥の鷹飼いになりかわって詠んだものであり、両目から流れ落ちる涙の「一筋」と、Aの琴の絃の数である「一筋」とを対比しつつ、思いがけない事態が発生したことへの感慨にひたる内容になっている。
- ⑤ BとCは、陸奥の鷹飼いが妻子になりかわって詠んだものであり、一家の主が立派あらしな仕事を任されたことの誇らしさと、あとに残されることになった身の頼りなさとの間で揺れる心の動きをとらえた連作となっている。

問6 この文章の表現の特徴と内容についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

- ① 陸奥の鷹飼いが帰郷後に家を手放すことになるという結末が用意されているにもかかわらず、そこに至るまでに、「井に住む鮎」「鳴る神につく獣」などを引き合いに出す大げさで滑稽な比喻表現が用いられているため、文章全体が暗い印象に包まれることなく、笑いと涙が入り交じる人生の機微が伝わるようになっていく。
- ② 都の人々が陸奥の鷹飼いの志を話題にする場面で、石井了陸は鷹飼いを「田舎人」として格下に見ているが、宮人は鷹飼いに対して「こととり申さん」と謙譲語を用いて敬意を表しているため、主人公の身分に変化が訪れたことが感じられるようになっており、立身出世をとげていく物語の伏線が張られている。
- ③ 陸奥の鷹飼いが一念発起して書道を学び終えるまでの心の動きが、「ゆくりなく思ひおこして」「しなへうらぶれつつ」「うれし」などとつづぶさに描かれた後に、一転して、幕府の方針で辺境に行かされる経緯が心情表現を伴わず淡々と記されることで、かえって現実の厳しさが際立ち、人生の悲哀が伝わってくる。
- ④ 前半部では陸奥の鷹飼いが上京する経緯が、後半部では防守に任命される経緯が、それぞれ簡潔に説明されているが、鷹飼いが都の人と交流する中盤の場面では「この田舎人は……」などの具体的な会話が見られ、貴族社会に積極的に溶け込んでいく様子が示されることで、物語の展開が起伏に富んだものになっている。
- ⑤ 「学ばまく欲りする」「踏みさくみて」などの万葉調の表現が使われたり、「むかし行平の中納言、流されて須磨におはせし時」といった平安時代の伝承が取り入れられたりすることで、古代の文化にあこがれる陸奥の鷹飼いの性格が顕著に示され、時代の流れに逆行しようとする姿が印象的にとらえられている。

第4問

北宋の文人政治家蘇東坡(蘇軾)は、かつて讒言にあつて捕らえられ、厳しい取り調べを受け黄州に流されたが、その後復権した。次の文章は、東坡が都に戻る道中での話である。これを読んで、後の問い(問1〜7)に答えよ。(設問の都合で返

り点・送り仮名を省いたところがある。)(配点 50)

東坡元豊間繫御史獄謫黄州元祐初起知登州未幾

以礼部員外郎召道中偶遇當時獄官甚有愧色東坡戲

之曰有蛇螫殺人為冥官所追議法当死蛇前訴曰誠有

罪然亦有功可以自贖冥官曰何功也蛇曰某有黄可治

病所活已数人矣吏考驗固不誣遂良久牽一牛至獄

吏曰此牛触殺人亦当死牛曰我亦有黄可以治病亦活

数人矣良久亦久之獄吏引一人至曰此人生常殺人

幸免死今当還命其人倉皇妄言亦有黄冥官大怒詰之

曰ハク『蛇(注11)黄・牛黄皆入ルコト薬ニ天下ノ所ナリ共ニ知ル汝ニ為レ人、何黄之有。』左 右

交(2)訊トウニ其人ノ窘ク甚シム曰ハク『某ニ別ニ無シ黄。但ダ有ル些ミト慚イ惶カノ。』
(注12)

(孫宗鑑『西畚瓊録』による)

(注) 1 元豊——年号。

2 御史——官吏の不正を取り調べる役人。

3 元祐——年号。

4 知ニ登州——登州の知事となる。

5 礼部員外郎——官職の名。

6 冥官——冥界の裁判官。古来中国では、死後の世界にも役所があり、冥官が死者の生前の行いによって死後の処遇を決すると考えられていた。

7 追議——死後、生前の罪を裁くこと。

8 考驗——取り調べること。

9 誣——欺く。いつわって言う。

10 倉皇——あわてて。

11 蛇黄・牛黄——ともに薬の名。蛇の腹や牛の肝からとるとされる。

12 慚惶——恥じて恐れ入ること。

問1 傍線部(1)「未_レ幾」・(2)「交」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は

28

29

(1)

「未_レ幾」

28

- ⑤ まもなく
④ たえず
③ おもむろに
② 思いがけず
① 突然に

(2)

「交」

29

- ⑤ あべこべに
④ 手を替え品を替え
③ 立て続けに
② かわるがわる
① 向かいあつて

問2 傍線部A「有蛇螫殺人、為冥官所追議、法当死」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なもの、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① 有_レ蛇螫_レ殺人、為_三冥官所_二追議、法_レ当_レ死
蛇有りて螫_かみて人を殺し、冥官の追議する所と為_り、法は死に当たる
- ② 有_レ蛇螫_レ殺人、為_三冥官所_二追議、法_レ当_レ死
蛇有りて螫みて人を殺さんとし、冥官の所に追議を為_すは、死に当たるに_{のつと}法る
- ③ 有_レ蛇螫_レ殺人、為_三冥官所_二追議、法_レ当_レ死
蛇有りて螫まれ殺されし人、冥官と為_りて追議する所は、死に当たるに_{のつと}法る
- ④ 有_三蛇螫_二殺人、為_三冥官所_二追議、法_レ当_レ死
蛇の螫むこと有_らば殺す人、冥官の追議する所の_た為_に、死に当たるに_{のつと}法る
- ⑤ 有_レ蛇螫_レ殺人、為_三冥官所_二追議、法_レ当_レ死
蛇有りて螫まれ殺されし人、為_三冥官の追議する所にして、法は死に当たる

問3 傍線部B「誠有_レ罪、然亦_レ有功、可_レ以自贖」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

31。

- ① 実際には罪がありますので、またすぐれた仕事をして自分で罪を帳消しにすべきなのです。
- ② たしかに罪はあるのですが、私には功績もあって自分自身で罪を償うことができます。
- ③ 結局は罪があるのですが、仕事の腕前によっておのずと罪は埋め合わされるのです。
- ④ もし罪があつたとしても、当然私の功名によって自然と罪が許されるようになるはずです。
- ⑤ 本当は罪があるのですが、それでもあなたの功德によって私の罪をお許しいただきたいのです。

問 4

本文中の二箇所の空欄

X

にはどちらも同じ語句が入る。その語句を(i)の①～⑤のうちから一つ選べ。また、(i)の

解答をふまえて、本文から読み取れる蛇と牛に対する冥官の判決理由を説明したものと最も適当なものを、(ii)の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

32

33

(i) 空欄に入る語句

32

① 得_レ免

② 不_レ還

③ 有_レ功

④ 得_レ死

⑤ 治_レ病

① 蛇も牛も、生前人を殺した上に、死後も「黄」によつて人を病氣から救うことができるとでたらめを言つて、反省していない。よつて、死罪とする。

② 蛇も牛も、人を殺してきた罪は許しがたい。よつて、今後「黄」によつて人を救う可能性はあつても、冥界に留め置き罪を償わせることとする。

③ 蛇も牛も、人を殺してきたが、体内の「黄」で将来は人の命を救う可能性は残っている。よつて、人の病氣を治すことで罪を償わせることとする。

④ 蛇も牛も、人を殺すという重大な罪を犯したが、自らの「黄」によつて人を病氣から救つてもきた。よつて、生前の罪を許すこととする。

⑤ 蛇も牛も、人を殺してきたというのは誤解で、むしろ大勢の人を「黄」によつて病から救うという善行を積んできた。よつて、無罪とする。

問5 傍線部C「冥官大怒」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

① 蛇や牛と同様に人にも「黄」があるので人を殺した罪は許されるはずであると、その人に理路整然と説明され、獄吏の言葉が論破されそうになったことにいらだちを感じたから。

② 蛇も牛も人もみな生前は人を殺していたのに、体内に「黄」があるのを良いことに言い逃ればかりし、全く反省の色が見られないその人の不謹慎な態度が気に障ったから。

③ 生前に人を殺した上に、冥界に連れてこられてからは自分にも蛇や牛のように体内に「黄」が欲しいと、獄吏にわがままばかりを言うその人の態度に我慢がならなかったから。

④ 蛇や牛は体内の「黄」で人を救っているのに、その人は「黄」の用い方を知らずにあいまいなことを言って、人を救わずに殺してばかりいることに憤りを感じたから。

⑤ 生前に人を殺したにもかかわらず、自分の罪を逃れるために、蛇や牛のまねをして自分の体内に「黄」があると、その場のしのぎのいい加減なことを言うその人の態度に腹を立てたから。

問6 傍線部D「汝為人、何黄之有」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番

号は

35。

- ① 汝の人と為り、何れの黄の有るや
- ② 汝は人の為に、何ぞ黄の之れ有らん
- ③ 汝は人為り、何の黄か之れ有らん
- ④ 汝は人を為りて、何をか黄の有るや
- ⑤ 汝の人を為むるや、何れに黄の之く有るか

問7 蘇東坡が獄官に語った話の内容と表現上の特色に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

① 相手が獄官であることから冥界での裁きの冗談を語って戯れ、黄州に流されたことを踏まえて「黄」を用いた話になっている。また、この「黄(くわう)」とこれに近い音の「当(たう)」を繰り返し用いることで、獄官の罪を執拗しつごうに迫及する気遣いがこもった表現になっている。

② 相手が獄官であることから冥界での裁きの冗談を語って戯れ、黄州に流されたことを踏まえて「黄」を用いた話になっている。また、この「黄」という明るい色彩の語を多用することで、自己の恨みの気持ちが完全に消えたことを獄官の心に深く印象づける表現になっている。

③ 相手が獄官であることから冥界での裁きの冗談を語って戯れ、判決の際に使われた「当」という語を多用した話になっている。また、この「当」という重々しい裁判用語を蛇と牛の滑稽こっけいな寓話ぐわの中に効果的に用いることで、自分を苦しめた獄官の行為を風刺する表現になっている。

④ 相手が獄官であることから冥界での裁きの冗談を語って戯れ、黄州に流されたことを踏まえて「黄」を用いた話になっている。また、この「黄(くわう)」と同じ音の語を含む「慚惶」を話の結末に効果的に用いることで、皮肉の中にもユーモアを込めた表現になっている。

⑤ 相手が獄官であることから冥界での裁きの冗談を語って戯れ、判決の際に使われた「当」という語を多用した話になっている。また、「当(たう)」という語と近い音の「功(こう)」という語を笑い話のキーワードにすることで、獄官を恥じ入らせる辛辣しんらつな表現になっている。